限界集落における地域交流施設の持続的な運営のための研究
−宮城県石巻市雄勝町波板地域交流センターを事例として−

東北大学大学院工学研究科　助教
土岐　文乃

1. はじめに

東日本大震災以後、宮城県石巻市の被災集落では住宅移転に伴い、集会施設の再建が進められている。しかし、地区の人口の流出・高齢化により、地域のコミュニティ活動や集会施設の運営・維持に問題を抱えているところは少なくない。石巻市雄勝町波板地区では、毎日、集会施設を地区の人や来訪者に開放し、地域内外の交流を促す取り組みを行なっており、外からの来訪者を様々な地域活動に巻き込むことで、新たな集落運営のあり方が模索されている。こうした地域内外の交流においては、活動を支える地域交流施設の果たす役割は大きい。しかしながら、これまでの研究では小規模集落の地域交流施設の具体的な運営方法や利用実態について参考となるものが少ない。本研究では、こうした地域交流施設の運営に焦点をあて、持続的な運営の仕組みを開発することを目的としたものである。

2. 波板地域交流センターの運営方法と利用実態

波板地区は、震災前世帯数 23 世帯から震災後 10 世帯での再スタートとなり、2013 年 5 月に著者を含む外部支援者と共同で地区内外の交流を図る地域コミュニティ活動「ナミイタ・ラボ」を立ち上げた。その後、集会所の建設費用を賄う補助金を獲得し、2014 年 6 月に「波板地域交流センター」が竣工した。集会所の特徴として、収益が見込まれる宿泊や物販など地区外利用者の想定がある。また、高齢者の支え合いのために、将来的に地区単位での介護サービスや買い物サポートを計画している。

ナミイタ・ラボは、集落にある豊かな地域資源を活かし、体験型ツアーやワークショップを通じて、交流人口を増やすとともに、持続可能な集落運営のあり方を模索することを目的としている。波板地域交流センターの運営方法はナミイタ・ラボの活動と連動しており、地区住民に限らず、顔の見える範囲で地区外からの活動参加者や施設利用者を受け入れるため会員制としている。

毎日地区住民の誰かしらがいるため、365 日開いているが、会員は基本的に予約して利用することになっている。3 年間の予約による利用状況をみると（表 1）、予約利用件数は 536 件あり、1 年間のうち

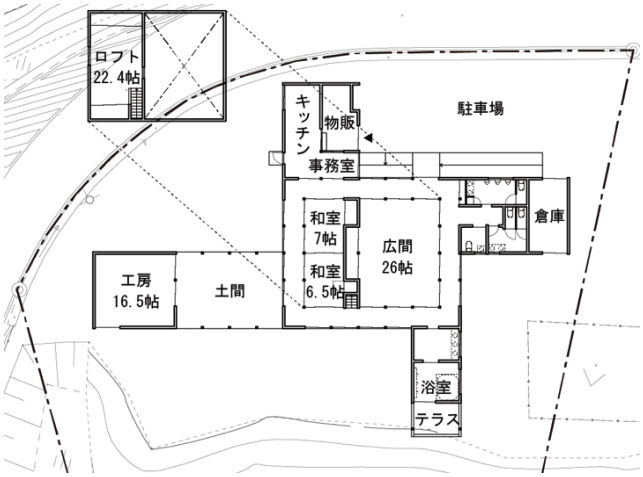

図 1　波板地域交流センターの平面図

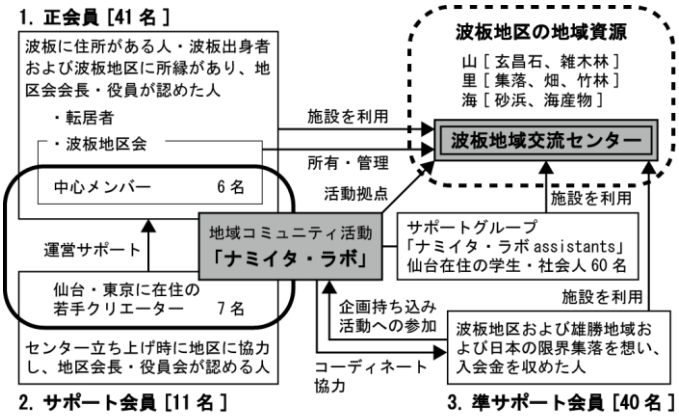

図 2　波板地域交流センターとナミイタ・ラボ

表 1　予約件数と利用者数

	2014 年度（6 月～翌 3 月）	2015 年度（4 月～翌 3 月）	2016 年度（4 月～翌 3 月）	3 年間の合計
予約件数	129 件	189 件	218 件	536 件
利用者数	1,588 人	1,914 人	1,912 人	5,414 人

表 2　利用内容

活動（199）	打ち合わせ・交流会（179）	視察等（100）
−介護教室（33） −緑に関わるボランティア活動（24） −ものづくりワークショップ（24） −イベント，ボランティア活動（66） −介護に関わるボランティア活動，食のワークショップ，体験学習，講習会，清掃活動（29） −講演会，研究会，防災訓練，まちづくりワークショップ（23）	−打ち合わせ（83） −交流会（35） −会議（16） −バーベキュー（16） −住民説明会（6） −老人会（3） −選挙会場，健康診断（5） −イベント準備（15）	−視察（48） −調査（37） −取材（15） その他（58） −宿泊のみ（58）

約 1/2 が利用されていた。利用内容を整理すると（表２）、【活動】、【打ち合わせ・交流会】、【視察等】の三種に大別され、【活動】と【打ち合わせ・交流会】が同数程度、【その他】の利用として、宿泊のみが全体の約 1 割みられた。利用者は石巻市外の利用が増加している。これらの利用を年度ごとに整理した結果、全体として一度の利用人数が多く宿泊を伴わない【活動】が増加していることがわかった。また、季節ごとの利用内容を確認すると、2014,2015 年度は春・冬の【打ち合わせ・交流会】が多かったのに対し、2016 年度には夏・秋の【活動】が増加しており、年間を通しての平日・休日の利用率は、休日の利用が大きく増加していることがわかった。

3.運営上の問題

上記のデータを踏まえながら、波板地区会の中心メンバーに運営上の問題をヒアリングした。その結果、大きくは以下に集約された。

① 取材や視察について、アポなしの訪問や訪問前日の連絡が多い。交流センターにいる間は各自それぞれ玄昌石の加工などの作業をしており、常に待機している人数が多くないため、作業が中断されてしまうことがある。

② 夏の土・日に予約が集中する。大人数の宿泊は収入源としても重要だが、先に少人数の予約が入っていると断らなくてはならない時がある。部屋のマッチングも工夫する必要がある。

③ 去年から、目にみえて定期的に来ていた NPO 等の利用が減った。利用件数・利用人数としては減っていないが、復興事業が完了した後の今後の利用状況に不安がある。

4.過疎先進地における事例調査

徳島県の集落の取り組みや地域活動等で活用される地域交流施設の調査を行った。調査を通して、様々な地域交流施設のあり方や運営の方法が確認された一方､365 日誰もが気軽に立ち寄れる場所は思いのほか少ないことがわかった。波板地域交流センターの特徴としてこの点は維持しながらも、どのように運営上の問題を改善していくかが重要である。徳島県の事例調査を波板地区住民に報告し、運営上の問題と照らし合わせながら話し合いを行い、具体的に実践可能な短期目標として今後の運営計画を下記の通り整理した。

エリア	人口	調査内容
上勝町	1,482 人	花野邸，日比ヶ谷ゴミステーション,いっきゅう茶屋
佐那河内村	2,197 人	新家、地域再生塾丹生谷応援団、佐那の里
那賀町	7,883 人	那賀町地域再生塾、おららの炭小屋
美波町	6,743 人	美波町城山交流拠点施設、美波町地域づくりセンター
神山町	4,967 人	NPO グリーンバレー、創造の森アートウォーク、サテライトオフィス

5.実践計画

１）利用のマッチング計画：波板地域交流センターの利用実態調査から、受け入れ可能な人数や活動の組み合わせを定め、利用受け入れの指針とする。

２）定期的なイベント活動：現在は、利用者の持ち込み企画として様々な【活動】が行われているが、これらは不定期で、全てのものについて情報発信を行うことは難しい。そこで、月１回地区の【自主企画】として、震災の語り部など集落の海から山までをめぐるプログラムを実施する。

３）有償の活動計画：現在の主な収入源は施設利用料であるが、【視察】や【自主企画】のプログラムは１人 1,000 円程度の有償とし、利用人数や地区負担のコントロールを目指す。

４）web を活用した予約の管理：これまで、波板地域交流センターの主たる利用者は雄勝町内や石巻市内からを想定していたため、予約管理は全て電話対応で行っていた。そのため連絡が任意なものとなったり、初めて波板地域交流センターを利用する人にハードルがあるなどの問題があった。しかし、利用実態調査では石巻市外の利用者が増加傾向にあることから、web を活用した予約の管理システムを導入し、波板地域交流センターの利用受け入れの仕組みを分かりやすく提示することで、石巻市外利用者のニーズに応えるとともに、新規利用者のアクセスビリティを高める。